「022 年・新型コロナ「軽症」でもつらい、自宅療養

2022 年 8 月 17 日　毎日新聞

自宅療養の女性を診察するファストドクターの渡辺譲医師(右)。女性は全身に現れた湿疹のかゆみに苦しんでいた(画像の一部を加工しています)＝東京都内で2022年8月4日、寺町六花撮影

感染拡大が止まらない新型コロナウイルスの第 7 波。自宅療養者数や救急搬送困難事案数は過去最多を記録し続け、医療現場の負荷は高まる。自宅療養者の往診を担う民間企業「ファストドクター」（東京都港区）の医師に同行取材すると、新型コロナ感染を理由に希望する医療をすぐに受けられない現状や、「軽症」でも決して軽くはない症状に苦しむ患者の姿があった。

息つく間ないファストドクター

4 日夜、東京都内のマンション。「ファストドクター」に登録する渡辺譲医師（38）が、防護服に身を包み、一室に入った。記者も同じ感染防護策をとり同行した。ファストドクターには全国で 1500 人以上の医師が登録。コロナ禍では東京や大阪など全国の自治体と連携し、夜間や休日、自宅療養者への救急往診やオンライン診療をしている。渡辺医師は訪問診療クリニックを経営する傍ら、ファストドクターに登録して自宅療養者の往診を連日続けている。

●全身に湿疹、眠れぬ

「かゆくて丸 2 日寝てません。総合病院に行きたくても、『コロナ患者は受け入れない』って」。顔をしかめて、渡辺医師に訴える高齢女性の体は、頭から足先まで赤い湿疹で覆われていた。女性は新型コロナ陽性と判明後に湿疹が現れ、3 日に全身に広がったという。皮膚科クリニックに患部の写真を送ると、ウイルス感染で皮膚が反応する「ウイルス性中毒疹」の疑いもあると言われた。

4 日早朝、どうしても我慢できず救急車を呼び、中で 1 時間待機したが、受け入れ先は見つからなかった。その後はクリニックが郵便受けに入れてくれたステロイド剤を服用。クリニックがいくつかの総合病院に掛け合ってくれたが、新型コロナ感染を理由に受け入れを断られたという。渡辺医師は「悪化するかどうかわからず、（この先）誰も医療者が診ないのはちょっと危ない」と判断。保健所に連絡し、翌日も受診できる病院を探すことになった。

4 日夜は全国で 130 人の医師が「ファストドクター」として診療に当たった。同社はコールセンターも含め人員を強化しているが、全ての往診依頼に対応できない日もある。これまでは、往診が必要な患者の基準を「6 時間以内に受診が必要な人」としてきたが、7 月 28 日からは「1 時間以内」に引き上げざるを得なくなった。

渡辺医師によると、入院が必要な患者を医療機関につなげようと電話しても、10 カ所以上にわたって断られるケースもあるという。「（患者の受け入れ先がなく）『119 番』がなかなか使えないというのは本当に末期。（病床は）かなり逼迫（ひっぱく）している」と話す。

この日往診に向かった患者の中には、肺炎が疑われ中等症とみられる高齢女性の他に、喉の強い痛みを訴え、水分や薬を取れていない人々もいた。熱中症の脱水症状も重なり、点滴の処置をすることも増えたという。

コロナ禍の初期から往診を続ける渡辺医師は、第7波では激しい喉の痛みや頭痛、めまいなどの症状が若い世代を中心にみられるようになったと指摘する。規定回数のワクチン接種をした患者は、未接種の場合に比べて症状が軽い例が多いと感じるが、ワクチンを接種されていても重い症状に苦しむ人もいるという。

●入院させたいが…

渡辺医師は、喉が痛くて水や薬も飲めない患者について「本当は入院させてあげたい」と語るが、その一方で「医療を保てない現状がある」とも感じている。

厚生労働省による診療の手引によると、血中酸素飽和度が96%以上あり、呼吸器症状がないか肺炎の所見が認められなければ「軽症」に当たる。一方で、酸素飽和度が低下し人工呼吸器の装着を必要とするなど、入院しなければならない患者も多い。

「『軽症』イコール『症状が軽い』というわけではない。つらいと思うが、往診サービスを利用して何とか乗り切ってもらうしかない」と渡辺医師。息つく間もなく、次の依頼先へ向かった。【寺町六花】